

ヘルベルト・フォン・カラヤンの病理における 他者との関係

中 広 全 延

抄 録

指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤン (Herbert von Karajan) において、自己愛の病理を指摘できる。オーケストラを排除した後、録音したテープを編集してミスのない完璧な演奏のレコードを作るように、カラヤンは伝記作成において、具合の悪い事実はカットし都合のよいものだけを集めてきて、自己の生涯を編集して完璧な作品にしようと試みた。批判や挫折に対して異常に傷つきやすいカラヤンは、批判や挫折に直面すると自分を攻撃し妨害する集団を想定することがあったが、それは彼の被害妄想とせざるを得ないのではないか。世界が敵意に満ち自分を攻撃してくる存在でいっぱいであると恐れていたカラヤンにとって、日本は元ナチス党员として弾劾されることもなくいつ来ても大歓迎してくれる友好国であった。日本という視点からカラヤンの病理は見えない、日本という他者との関係においてそれは現れない、ということになるかもしれない。

1. カラヤンと漱石、誰から見た病理か？

ヘルベルト・フォン・カラヤン (Herbert von Karajan : 1908.4.5. ~ 1989.7.16.) は、最も有名な指揮者である。DSM-IV-TR¹⁾は自己愛性人格障害の基本的特徴として、誇大性、賞賛されたいという欲求、共感の欠如をあげている。また、自己愛性人格障害をもつ人は、批判や挫折による“傷つき”に対して非常に敏感であり、批判はその人の脳裏を離れず、軽蔑、激怒、傲慢な反撃、といった反応を示す¹⁾。カラヤンにも、これらは当てはまる。彼は、自己愛性人格障害の患者と共通する内的世界と行動様式を持っており、DSM-IV-TRの診断基準項目をすべて満たすが、現実世界で成功し適応的であったから自己愛性人格障害とは診断できず、「自己愛性人格をもつ人」という表現が適当である、と私は先行研究¹⁴⁾において論じた。

カラヤンは精神科医とは縁のない世界の住人である。しかし、実際に精神科を受診したことがなかったとしても、彼には正常範囲を逸脱しているのではないかとと思われる部分がある。ただし、「正常範囲を逸脱している」かどうかの判定は、絶対的な基準が存在するわけではなく、数値化して判断できるはずもなく、究極的には社会通念、常識によらざるを得ない。精神の病

理において、それが正常か異常か、健康か病気かは、時代や地域により異なることがあり、多分に社会的文化的文脈に依存するといえる。それとともに、誰からどの視点から見た、異常さ、病理なのか、という問題もあるのではないか。本人が困って自分から受診したのではない場合は、日常の臨床場面でも、このことが問題になることがあろう。しかし病跡学において、当然ながら対象となる傑出した人物は病跡学的研究を行う精神科医を受診しないから、この問題はよりいっそう先鋭化すると予想される。これを考えるための一例として、ここで夏目漱石について少しだけ触れてみたい。

夏目漱石は、病跡学の対象になることが最も多い人物のひとりであろう⁹⁾。しかし、彼に対する診断が諸家の間で一致しないのは周知の事実である²⁰⁾。診断は分かれるにせよ精神科医から見れば、漱石が何らかの精神医学的疾患であったことは明らかであるが、一般の人々がそのことを知っているか、あるいは認めるかどうか。かく言う私も精神科医になるまでは、漱石が患った病気といえば消化器系の身体疾患しか思い浮かばなかった。漱石の評伝に「神経衰弱」なるよくわからない病名が出てきても、それと彼の創作活動とを関係づけることは、精神医学・病跡学を知らない者には無理な話である。漱石の書いたものを普通に読んでいる限り彼の病理に気がつかないだろうし、漱石は社会的には破綻を来さず教師や作家という仕事をして生活していた。胃潰瘍からの大出血は身体的な破綻である、と言えるかもしれないが、それは「身体的な破綻」であり「社会的な破綻」とは言えないであろう。さらに漱石には、多くの弟子と呼ばれる人たちがおり、漱石を慕っていた。ゆえに、精神医学的には精神病と診断できると主張しても、一般の人々が納得しかねるかもしれない。

漱石と親しく接した弟子たちにも、彼は決して異常とうつらなかつた。漱石の長男、夏目純一は次のように書いている。「たまに家へ来た小宮さんや和辻さんなど昔のお弟子さんに、父が親としてはいつもよい父とは言えなかつたこと、周期的に異常になって私などをたいした理由もなく殴ったり、とうてい尋常と思えないところのあつたことなどを話すと、その人達はきまうて言うのだった。『それは君が可愛かつたから殴つたんだよ。異常だの尋常でないなど、とんでもない。……』と」¹⁶⁾。弟子たちは皆、漱石に異常を感じなかつたが、彼らが同じように漱石を見ていたかと言えば、そうではない。漱石は非常に複雑な人物だつたのか、「たとえば小宮豊隆と森田草平との漱石観の対立」を江藤淳³⁾は指摘している。高橋正雄²²⁾によると、全体的な漱石像だけではなく漱石の精神疾患をめぐっても、小宮豊隆と森田草平の間に見解の対立があつた。小宮豊隆は漱石が精神病であつたことを否定するのに対して、森田草平は漱石精神病説を肯定しているという。しかしその森田草平も、「漱石の作品を読んだり自ら接した範囲では、漱石の異常を感じたこともなければ、そのような言動があるなどと想像したこともないとして、漱石の精神病は家族やその周囲の人々に限定的に現れたのではないかという考えを示している」²²⁾。全面的な「漱石精神病説」をとるのは、「家族やその周囲の人々」と精神科医・病跡学者だけになりそうである。病跡学的見地から精神病と創造の関係を力説しても、

受け入れられるかどうか。このように考えると、漱石に精神医学的診断を下す意義は、「家族やその周囲の人々」に限られたものになるかもしれない。実際、「これ^(註1)を読んだとき、私は救われたような、心の重荷がおりのような気持ちでいっぱいになった。やはり父は、病気であったのだ¹⁶⁾」と、夏目純一は記している。精神医学的診断が「家族やその周囲の人々」に有益であったとしても、それがもし漱石の生前に下されたと仮定して、彼自身にとっても有益であったらうか。これに関しては、意見が分かれるのではないか。いわんや、一般の漱石の読者にとって意義を持つかどうか疑問である、との意見も精神科医・病跡学者以外からは提出され得るであろう。大部分の読者は漱石の精神の病理を考えながら彼の小説は読まないだろうし、私自身も過去においては考えなかった。そうならば、漱石の精神の病理は、「家族やその周囲の人々」の視点、「精神疾患と創造の関係」を考察する病跡学的視点、これらの視点から見たときのみの存在である、ということになりはしないか。このように書くと誤解を生むかもしれないので付言しておくが、ここに病跡学的考察を試みている筆者は、もちろん病跡学に対して否定的ではないし、漱石文学の深い読みにも精神医学的視点は不可欠であると考えている。

ほとんどの日本人は指揮者カラヤンのことを知っていると思われる。しかし、彼がナチス党员であったことを知る人は、日本には少ないのではないか。カラヤンの戦後に、物理的にも歴史的、文化的にもヨーロッパからはるかに離れた日本では想像できないほど、ナチスという過去が大きな暗い影を落としている。結論を先回りして言うと、ナチス以外でもそうなのだが、とりわけナチスに関することになるとカラヤンはその病理性をあらわにするように見える。レコード会社や音楽ジャーナリズムはカラヤン・サイドが流す情報を受け売りにする傾向がなきにしもあらずであったので、多くの日本人はカラヤン自身が他者にそう見られたいと欲していたカラヤン像を〈指揮者カラヤン〉と理解していたように思われる。後に触れる女流クラリネット奏者、ザビーネ・マイヤーのベルリン・フィル入団問題が、多くの日本人に初めてカラヤンの別の側面を知らしめた出来事であった。カラヤンの演奏会に行き彼のレコードを聴くだけでは、「彼の問題のある側面」²³⁾がわからないのは当然である。

本稿のテーマはカラヤンであり漱石の病跡を論ずることではないが、漱石の病理がカラヤン（自己愛の病理）と同じではないことは明白であろう。よって、彼らが被害妄想という共通の精神症状を呈したとしても、その発生のメカニズムは異なると考えられる。しかし、カラヤンと漱石、両者ともに誰から見た病理なのかという問題があるように思われる。漱石を持ち出したついでで言うと、彼の病跡に関する多様な見解についても、一度この点から考えてみる価値があるかもしれない。

ここでは、伝記を出発点としてカラヤンと他者の関係をめぐって、先行研究^{14,15)}をふまえて、さらに考察を深めることを試みる。また、そのひとつの例として漱石において顕在化しているような、精神の病気を診断することの困難さあるいは多義性、誰から見たどの場所からの診断なのかという問題にも触れてみたい。

2. ふたつの伝記

病跡学的研究は、あるひとつの症例を徹底的に検討し報告するという一面を持つ。症例報告は診察場で得られた情報を素材とするが、病跡学では実際に診察したことの無い傑出した人物を研究対象にするのだから、もちろんそれは不可能である。カラヤンについての回想録や伝記に書かれている彼自身の発言や彼をよく知る人たちの証言などを素材として用いる。しかしカラヤンの伝記は、彼が自己愛性人格をもつがために、その内容以前の成立過程から検討に値する。まずこの点から始めよう。

カラヤンの伝記は多数出版されているが、それらは大きくふたつに分けることができる。ひとつはカラヤンの校閲が隅々まで行われているもの、もうひとつはカラヤンの承認を得ずに出版されたものである。

前者の代表例が、「直接の対談と豊富な基礎資料を根底とし、『帝王伝』の基本文献として後々まで引用された」¹⁸⁾エルンスト・ホイサーマン著の『カラヤン ——人と芸術——』⁵⁾である。カラヤンの伝記について、「ちなみに彼の伝記はどれを読んでもほぼ同じである。彼が検閲しないものは出版させなかったからである。従って敵側の伝記はこれから世に出てくるわけで、彼の生涯の謎の部分はまもなく解けてくるであろう」と言われていた⁷⁾。カラヤンが校閲し承認した伝記は、彼が世間に広めたいと欲しているイメージで頁が埋め尽くされている。自己愛性人格障害の患者は診察場面で、自慢話をし自分がいかに重要な人物であるかあるいはポジションにいるか、さりげなくあるいはあからさまに強調するというが⁶⁾、校閲された伝記はまさしくそのような内容となっている。

1960年代初頭からカラヤンと親交のあったローベルト・C・バッハマンは、カラヤンから伝記の執筆をもちかけられた。カラヤン自身も協力を惜しまないということで計画はスタートしたが、原稿を修正しようとカラヤンが圧力を加えてきたことや、同じ時期にカラヤンが複数の作家に伝記作成を依頼していたことなどから、バッハマンはカラヤンの人間性に疑問を抱くようになった。そしてバッハマンはカラヤンの影響を排し、自分の信じることを表現して、『カラヤン 栄光の裏側に』²⁾を著した。その日本語版の訳者は、「その意味で、本書は初めて全く自由な立場で書かれたカラヤン伝といえよう」と記している²⁴⁾。

だが、カラヤンがその人格を形成した経緯や要因について考察するための材料は、残念ながら皆無といってよい。伝記執筆のためカラヤンにインタビューしたバッハマンによると、「多くのことが自発的に語られているが、それも仮面がはがれそうになるとすぐに引っこめられる」、「カラヤンは自分の少年時代について口をつぐんでしまう」といったぐあいである²⁾。いわんやカラヤンの少年期以前について、今から100年近く昔のことを知る人はもはやいないし、調べたかぎりでは誰も記録に残していない。人がよく知るのは、「自己愛性人格をもつ人」に特徴的な堅い「鎧」¹⁴⁾を身につけてしまっただけからのカラヤンである。

数々のアニメーション映画の古典的名作を製作し、またディズニー・ランドを創設したウォルト・ディズニー (Walt Disney) の伝記も、同様にふたつに分けることができる。一方はウォルト・ディズニー・スタジオ公認のものであり、他方はそうではない伝記である。「公認」の伝記には書かれていない影（裏）の部分にこそ「公の顔」ではない真のディズニーその人を知る鍵があるとして、「非公認」の伝記からの素材を中心に病跡学的考察がなされている⁸⁾。このことはある程度までカラヤンにも言い得るが、ディズニーとは（病跡学的）診断が異なるがゆえに、カラヤン「公認」の伝記は決して無価値ではなく積極的な意味がある。彼が校閲承認した伝記は、「自己愛性人格をもつ人」であるカラヤンが、どのようなものと自己をイメージしていたか、どのように自己を見られたいと欲していたか、を知る資料として非常に貴重である。ディズニーとは違ってカラヤンの場合は、影（裏）の部分だけが真のカラヤンなのではなく、「公の顔」も合わせて全体でカラヤンなのである。

3. ナチス

カラヤンが承認した伝記とバッハマン²⁾によるものとは、カラヤンとナチスの関係について記述が大きく異なる。ホイサーマン⁵⁾によると、カラヤンは「わたしが、ナチの黨員であったことは周知の事実である。正確に言えば、わたしは1935年、アーヘンで音楽総監督になる直前に入党した。わたしが待ち望んでいたポストを目の前にした、任命三日まえ、市の局長がわたしのところに来てこういった。『ところで、まだ書類上の手続きがあります。カラヤンさん、あなたは、まだナチ黨員ではありません。区長の通達によりますと、ナチ黨員でなくては、あなたはこのようなポストにつけないのです』そこで、わたしはこの書類に署名した」と証言している。カラヤンは、アイガーに登るためスイス・アルプス協会に登録するように、指揮活動を続けるのに必要な形式的手続きとして1935年ナチス党に入党した、とバッハマンに対しても語っている²⁾。バッハマンは、1933年5月2日から1937年5月1日まで入党が禁止されていたという歴史的事実、および、ジャーナリストのポール・ムーアが捜し出してきたナチス党中央登録索引カードを根拠に、カラヤンが1933年4月8日オーストリアのナチス党にザルツブルクで入党し、同年5月1日にはドイツのウルムでも再び入党したと主張している。

カラヤンを親しく知る人は、ナチスとの関わりについて批判的なバッハマンとは異なる見方をしている。カラヤンの兄ヴォルフガングは、「ヘルベルトはヒットラーを嫌っていた。二人の独裁者は並び立たないからだ」と語っている¹¹⁾。「カラヤンも、ナチス党に二度も入党してはいるが、確信あつての黨員ではなかった。彼が熱中し、親しみのこもった言葉をかけることのできた、唯一の関心ある党とはカラヤン党だった」と、ベルリン・フィルの首席打楽器奏者を35年間勤めたヴェルナー・テーリヒェンも同様のことを言っている²³⁾。

従来はこのように、ナチス党中央登録索引カードを決定的証拠として、カラヤンは1933年ナ

チスに二度入党した、とするのが定説であった。しかし、最近カラヤンの伝記を著したりチャード・オズボーンは、登録索引カードにある1933年5月1日という記載は実際に入党した日付ではなく、書類上その日にさかのぼって入党したことになるだけであり、そのことがカードにある記録から読み取れる、と主張している。オズボーンは記されているカラヤンの党員番号3430914が1935年に割り振られたものであり、カラヤンが一貫して言い続けていた1935年アーヘンで政治的圧力によりナチスに入党したという発言と一致すると、バッハマンらに反論している¹⁷⁾。書類に書かれている日付が実際のものとは異なると証明することは、かなりハードルが高いと思われる。1933年5月1日とは、カラヤンほど重要人物ではなく特別扱いされない普通の人々が当面入党できた最後の日である。その日に書類上さかのぼって入党したことになる例がカラヤン以外にもあることをオズボーンが示せば説得力は格段に増すと思われるが、それはしていない。しかしもしここで仮にオズボーン的主張が正しいとすれば、確実に動かし難い事実として残るのは、カラヤンが1933年4月8日ザルツブルクで入党手続きをし、彼に1607525という党員番号（あるいは仮党員番号^{註2)}）が与えられた、ということである。カラヤンに好意的なオズボーンも、それは認めている。しかし、ザルツブルクで入党手続きをした事実について、カラヤンが検閲した伝記には出てこない。

倫理的問題を検討することは、本研究の目的ではない。それは読者にゆだねたい。彼の人格傾向と過去の行為に対してとる態度がどのように関係するか、それを考察するのがここでの仕事である。「自己愛性人格をもつ人」は、他者からの賞賛や自己の思い描く万能感により誇大的自己を維持し安定を保っている。批判や挫折は、誇大的自己にダメージを与え安定を壊しかねない。彼は、過去の失敗を容認できず、他者からの批判は拒絶しなければならない。戦後、〈ナチス＝絶対的な悪者〉という政治的枠組の中で、ナチス党員という過去が批判の対象となる社会状況であったことは確かであろう。このことをカラヤンも十分承知していたはずである。自己愛性人格をもつ彼は、批判を退け誇大的自己を守らねばならない。カラヤンには、ザルツブルクで入党手続きをした真実を認めて批判に真っ正面から向き合う、というようなことは到底できない相談なのである。

4. 編集

人生での出来事は、どんなに個人的なことでも、頭の中の想像ではなく現実に起こったことであれば、必ず誰か他の人たちとの関係において起こったものであり、その人ひとりのものではない。すべての出来事は、その人だけでは起こらず他者とともに起こる。そして、人は他者とともに時間を過ごす。いっしょに年を重ねる、と言ってもよい。

指揮者にとって演奏行為の場面での他者とは、オーケストラである¹³⁾。指揮者はオーケストラと「いっしょに」、音楽を作り上げる。これは当たり前すぎていまさら言う必要もないよう

にみえるが、カラヤンにおいてはそうでなかった。これからの議論に必要な所を、先行研究から引用してみよう。「録音したものを編集することは、指揮者とオーケストラがともに音楽を体験した時間の流れを尊重せず、自分が欲する完全な理想の音響の実現を優先することである。そこにおいてオーケストラは、対等に協力しあって音楽するパートナーではなく、後で編集して曲を再構成するための素材を提供するだけの手段におとしめられてしまっている。このようにとらえるならば、カラヤンのレコード録音における編集はきわめて自己愛的な手法と考えられる。一方コンサートでは、カラヤンは現実のオーケストラの『あやまりや、不完全な点を無視し、そのかわりに、それだけ精神を集中して、幻想上のオーケストラを聴くということ』⁵⁾をしていた。これでは、物理空間としては同じ場所にいるのだが、音楽体験においてはどうして同じ場所にいるとはいえないのではないか。……カラヤンにとって、レコード録音でもコンサートでも、オーケストラは対等な立場で尊重し音楽体験をともにする相手ではなかった。……カラヤンはオーケストラという他者とともにあることがなかった」¹⁵⁾。

オーケストラを排除した後、録音したテープを編集してミスのない完璧な演奏のレコードを作るように、カラヤンは自己の生涯を編集して完璧な作品にしようと試みた。カラヤンは伝記において、具合の悪い事実はカットし都合のよいものだけを集めてきて、困難な時代を生きぬいて成功した「英雄の生涯」を提示した、と私は考える。彼にとって伝記作成とは、人生の編集作業にほかならない。伝記も含めて「カラヤンの自己宣伝の行為が押し付けがましいほどわかりやすかった」¹⁴⁾が、彼が宣伝するカラヤンは彼があらまほしいものとしてイメージするカラヤンである。大部分の日本人は、その宣伝されたカラヤン・イメージしか知らず、それが彼のすべてである、と理解していた。日本にいては、あらまほしいイメージからは外れる宣伝されない別の側面を知る機会がまったくなかった、と言ってよいであろう。

上述のごとくどんな出来事でも、それは他者とともに他者との関係において起こったのであり、彼ひとりの専有物ではなく他者との共有物である。強引な仮定として他者を完全に排除して自分以外誰もいない状態にすれば、起こった出来事の修正、過去の事実の改ざんを行っても、他者はいない（誰もいない）のだからどこからもクレームのつきようがないし誰も気がつかない、ということになる。逆に言えば、他者がいれば（現実世界では、「いれば」というような仮定ではなく、「いる」にきまっているのだが）、起こった出来事の修正、過去の事実の改ざん、編集作業は不可能である。「自己の生涯を編集して完璧な作品にしよう」とするカラヤンの試みは、自己愛的な空想の世界でのみ可能であり、現実世界では初めから挫折しているのではないか。

5. 「奴らは私が死ぬのを待っていますよ」

自己愛的な空想の世界では、自分は全知全能であり誇大な自己像が充足される。ところが現実の世界はそうはいかない。他者は自己の目的を達成するためだけに存在するのではなく、目的の達成に協力しなかったり時には邪魔する存在にもなりえる。すべて自分の思いどおりになる他者は、主体をもたない操り人形であり、もはや他者といえない存在ではないか。主体をもつ他者が登場すると、自己愛的な空想の世界は崩壊し始める¹⁵⁾。自己愛的な世界を構築するために、伝記やレコード製作で他者を排除しても、現実には他者はそこにいる。操り人形ではない現実世界での他者は、カラヤンにどのようにうつたであらうか。

ベルリン・フィルのインテンダント（支配人）として同楽団の運営に長年携わってきたヴォルフガング・シュトレゼマンは、「いくらカラヤンから高く買われていた人でも、いったん彼を怒らせて仲違いしてしまったが最後、ひどい目に会うことになる。……そして好意と信頼が嫌悪と不信に様変わりしてしまい、あげくのはてに、今度はマイナス評価を下したその人間と相変わらず付き合っている者までみな、不信の目で見るのである」と言っている²¹⁾。『味方でない者は敵である』とはカラヤンのモットーであり、彼のどんな伝記にでも出てくる言葉である⁷⁾。自己が他者にむけた「嫌悪と不信」を、逆にカラヤンが常に他者から感じとり、敵意と受けとっていたことがうかがえる。栄光と名声に包まれた全知全能のカラヤンとともに、世界が攻撃的、支配的、妨害的、搾取的であると恐れているカラヤンがいる。それは、彼自身が他者に対して、攻撃的、支配的、妨害的、搾取的であることの、彼の「人間的交流を欠く搾取的な対人関係」¹⁴⁾の、裏返しであろう。

1970年代半ば、「ベルリン・フィルとはうまくいっていますか」というごく一般的な質問に対して、カラヤンは「奴らは私が死ぬのを待っていますよ」と答えた²⁾。カラヤンとベルリン・フィルの関係が仲のよい家族のようなものと信じられていた当時であって、これは驚くべき発言と受け止められた。常軌を逸した過激な発言ともいえる。しかし、この言葉はカラヤンから見た他者の在りようをよくあらわしている。

ベルリン・フィルの集客能力、興業成績、あるいは評判、名声は、ハンス・フォン・ビューロー (Hans von Bülow : 1830~1894)、アルトゥール・ニキシュ (Arthur Nikisch : 1855~1922)、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー (Wilhelm Furtwängler : 1886~1954) といった歴代の首席指揮者に負うところが大きい。カラヤンにも、そうである。さらに彼の時代になってからは、レコードの印税という楽団員にとってありがたい収入をカラヤンはもたらした。ベルリン・フィルのメンバーがカラヤンを人間的に好いていたかどうかは別として、ビジネス上はベルリン・フィルがカラヤンを必要としていることは客観的事実であった。そのように明瞭かつ簡単なことは、カラヤンも少し冷静に考えればわかりそうなものである。「奴らは私が死ぬのを待っていますよ」という発言は、彼の被害妄想から出て来たものであろうか。

6. マフィア

1955年戦後初のベルリン・フィルのアメリカ演奏旅行に際して、カラヤンがナチス党員であったという過去などに対して一部の人たちから激しい抗議行動が起こった。ユダヤ人組織のメンバーが、カーネギー・ホールの前でデモをおこないコンサートを妨害しようとした。「演奏中に鳩が飛んで来ました。あれは確か『エロイカ』の時だったと思います。演奏自体は大成功に終わったのですが、オーケストラ内には緊張した空気が漂っていました。デモは何といてもショックだったのです」と、ベルリン・フィルの首席フルート奏者であったオーレル・ニコレは当時の模様を話している¹⁰⁾。攻撃の標的となった張本人のカラヤンが、ニコレ以上に驚きショックをうけ、長く残る深い傷を負ったであろうことは想像にかたくない。

「当時のマフィアは、誰もオーケストラに近づかせませんでした。どうしても、アメリカで生まれたという事実がなければならなかったのです。彼らは外国人をそういうふうに締め出したのです。彼らが戦後にやったのと全く同じやり方です」、「それは第二次世界大戦直後に、私の出世を妨害し破壊しようと誓った人々の集団です。ことは計画的に行われています」と、カラヤンは語っている²⁾。我々の日常的な認識からすれば、カラヤンがいうところの「マフィア」や「集団」の存在はにわかに信じ難い。前項で触れた「奴らは私が死ぬのを待っていますよ」を被害妄想とするかどうか判断が難しいかもしれないが、「マフィア」や「集団」はカラヤンの被害妄想の産物とせざるを得ないのではないか。カラヤンのこのような発言に関しては、「何か批判があると、その裏側に陰謀をたくらむ集団がいるのではないかと妄想を抱くのだ」と、バッハマンも述べている²⁾。上に引用した発言にみられる妄想の内容は、戦後初のアメリカ演奏旅行においてナチスに関する事柄で抗議行動を受けたことに、心理的関連をたどれるかもしれない。妄想という形式が発生した機序については、ひとつの可能性として、批判や挫折に対して異常に傷つきやすいカラヤンが病的な反応として自分を攻撃し妨害する存在を想定した、とすることができるのではないか。カラヤンは社会生活上不適応を起こさず成功を取めたが、この点に関しては病理的だったとは言えまいか。

7. 怒りそして復讐

カラヤンが宣伝するすべてにおいて完璧なカラヤンとは裏腹に、彼には弱さや傷つきやすさが潜んでいる¹⁴⁾。そのように過敏なカラヤンは、「ほんの少しでも意見を言う者」²³⁾や「自分の思うままに従ったり行動したりしない者」²⁾が出現すると批判や拒絶と感じてしまい、一転して攻撃的となり、怒りくるい、徹底的に反撃しようとした。あるいは、こうも言い換えられる。カラヤンにとって他者とはその利用価値がすべてであり、他者の利用に失敗すると、敗北に耐えられない彼は激怒して復讐を誓った。

1956年カラヤンはウィーン国立歌劇場芸術監督に就任した。そこでは、カラヤンの私的秘書のアンдре・フォン・マットーニが推薦の見返りとして歌手の出演料の上前をはねているという疑惑、オーケストラのピッチを $a'=440\text{Hz}$ と $a'=448\text{Hz}$ のどちらにするかといういわゆるコンサート・ピッチ戦争、不手際による公演中止、劇場労働組合との紛争、共同監督との確執、官僚主義的な役人たちとの対立など、ありとあらゆるトラブルが次々に起こった。カラヤンは自分の思いどおりに事が運ばないことに憤慨し、1964年ウィーン国立歌劇場芸術監督を辞任した。この辞任にあたりカラヤンは、「1964年8月31日をもって、オーストリアにおける一切の活動を停止する」と宣言し、自分の祖国オーストリアでは指揮しないと宣言した¹¹⁾。この事態の異常さを理解しやすくするためにあえて例えれば、小澤征爾がNHK交響楽団とのトラブルがもとで、日本では一切指揮をしない、と宣言したようなものである。現実には1962年、小澤征爾の指揮をNHK交響楽団が拒否するという事件が起こったが、二度と日本では指揮しない、などとももちろん彼は言わなかった。

カラヤンは自分自身の宣言を厳格には守らず、音楽史上初めての演奏家個人による音楽祭といえるザルツブルク復活祭音楽祭を1967年に創設して、まずは故郷で指揮活動を始めた。ウィーン国立歌劇場とは後に和解し、1977年5月8日『トロヴァトーレ』を指揮して聴衆に熱狂的に歓迎され復帰している。ただ、現在とは違い普通の日本人が簡単に渡航できなかった1964年当時、ウィーン国立歌劇場は日本からあまりにも遠かったせいで、この事件は日本ではあまり話題にならなかった。

1982年には、カラヤンが推薦する女性クラリネット奏者、ザビーネ・マイヤーの入団をベルリン・フィルが拒否したため、カラヤンはベルリン・フィルとの演奏旅行と音楽ソフトの製作をキャンセルした¹¹⁾。ベルリン・フィルのメンバーにとって、カラヤンとの音楽ソフトの印税は重要な副収入である。カラヤンは彼らの収入源のひとつを断って、金銭的に報復しようというのである。カラヤンが長年にわたり終身首席指揮者としてベルリン・フィルと一心同体であると外部からは見られていただけに、この対立は我々を驚かせた。

この事件の後日談としては、ベルリン・フィル側が初の女性団員としてヴァイオリニスト、マデライネ・カルッツォを採用して、問題が楽団への女性参入ではないことを巧妙にアピールするなど、泥仕合の様相を呈した。1984年にはいり、ザビーネ・マイヤーが自分からベルリン・フィルのポストを辞退し、カラヤンとベルリン・フィルは和解した。1984年9月29日パッハのロ短調ミサ曲をカラヤン指揮でベルリン・フィルが演奏するという象徴的行為をへて、事態は収拾した。

上のふたつは最も有名な例であるが、カラヤンの憤怒も報復手段も異常かつ過度であると言わざるを得ないであろう。

8. カラヤンと日本

シュナイダー¹⁹⁾は、彼の有名な精神病質人格の類型は「診断と似ているように見える。しかしこれは全然正しくない類推である。……人や人格は疾病や疾病の心的結果などのように、診断のレッテルをはることはできない」、「はり紙でもするようにはっきりした名称をつけるやり方では、現実の人間のごく一部分、すなわち特別な観点の下で特に重要な個々の性質しか扱えない」、「しかし人間全体に関係させてみた場合、もっと重要な性質をいい表しているような名称でも、やはり形式的なものにすぎず、決して人間を知る上にじゅうぶんなものとはいえない。……このような種々の特性が、人格全般にわたっている場合はめったにないことは明らかである」としている。DSM が規定する人格障害はⅡ軸上の診断であり、シュナイダーの精神病質人格とは異なる概念である。しかし、DSM の人格障害が問題にしている「人格」とシュナイダーの精神病質人格における「人格」が、同一物を指しているかどうか即答は難しいにしても、全く別物とはできないであろう。ゆえに人格における病理という点で、DSM が規定する人格障害にも、それが「人格全般にわたっている場合はめったにないことは明らかである」というシュナイダーの言葉が当てはまるのではないか。もちろん人格障害のタイプにより、また個々の症例により、その人格障害がその人の人格のいか程の割合を占めているかは千差万別であろう。だが、人格の100%を被い尽くしていることはない、と言えるのではないか。

さらに、その人の人格の何分の一かを占めている人格障害が現れやすい状況といったものがあるのではないか。これは人格障害だけではなく他の種類の精神の病理にも、症例によっては当てはまるかもしれない。「状況」と言っても、ここでは対人的「状況」、すなわち「他者との関係」ということに焦点を絞ってみると、ある他者Aに対する関係においては病理性が認められるが、別の他者Bに対してはそうではない、というようなことが起こり得るだろう。自己愛の病理においても、これは起こり得る。あるいは自己愛の病理においてこそ、顕著に起こるかもしれない。

「人間カラヤンと芸術家カラヤンとを同じように評価するのは至難ないし不可能であることは繰り返し同僚から聞かされているし、私自身でも知っている。演奏会の聴衆が会うのは芸術家としてのカラヤンだけだが、フィルハルモニー一家の楽員たちの立場はもっとつらい。カラヤンの素晴らしい能力だけでなく、彼の問題のある側面も彼らは思い知らされている」と、テーリヒェンは記している²³⁾。カラヤンの本拠地からはるか遠い日本では、前項で触れたザビーネ・マイヤーの件が起こるまで、「彼の問題のある側面」を知る由もなく、「カラヤンの素晴らしい能力だけ」が発揮された。「カラヤンはテレビのおかげで、最も忠実で最も多くのファンを日本に得た」と、バッハマンも言っている²⁾。またカラヤンのレコードは、日本でよく売れた⁴⁾。

カラヤンは、1954年にNHK交響楽団を振りに単身来日して以来、1959年にはウィーン・フ

ィルとともに、手兵のベルリン・フィルとは1957年を皮切りに1988年まで計9回、日本へ演奏旅行に来ている⁴⁾。1988年の最後のベルリン・フィルとの来日では、直前の4月19日に予定されていたベルリンでのコンサートを病気を理由にキャンセルしたにもかかわらず、4月26日には日本に向け出発した。そしてベルリン・フィルを率いて、大阪で2回（4月29日、30日）、東京で3回（5月2日、4日、5日）の演奏会を指揮した。カラヤンのこれら一連の行動をめぐっては、ザルツブルクや日本^(註3)でばかり指揮しベルリンを不在がちであることに対して、ベルリン市当局が公然と不快感を表明するということが起こった¹²⁾。世界が敵意に満ち自分を攻撃してくる存在でいっぱいであると恐れていたカラヤンにとって、日本は元ナチス党員として弾劾されることもなくいつ来ても大歓迎してくれる友好国であり、日本の聴衆は彼が思い描く理想の聴衆であったように思われる。

小澤征爾はカラヤンに指導を受けたことがあり、カラヤンを師と仰いでいる。漱石の弟子に漱石が異常と感じられなかったように、既に先行研究¹⁴⁾で言及したごとく、カラヤンの病理は小澤征爾の前には現れなかったと想像される。本稿の冒頭で議論したように、漱石の病理が「家族やその周囲の人々」と精神科医・病跡学者のものであるとするならば、カラヤンの病理も彼の「家族」というべきベルリン・フィルや「その周囲」のバッハマンなどの人々と精神科医・病跡学者のものではないか。漱石の読者が漱石の病理に気がつかないように、カラヤンの聴衆、特に日本の聴衆には、カラヤンの病理はわからない、と言えるのではないか。精神の病理は、正常か異常か、一義的に決定できず、それを見る場所により変わることがあるだろう。日本という視点からカラヤンの病理は見えない、日本という他者との関係においてそれは現れない、ということになるかもしれない。

註1：引用した箇所少し前に出てくる「千谷七郎さんの本」を指すが、それはおそらく千谷七郎著『漱石の病跡 ——病気と作品から——』（勁草書房、1963年）であると推定される。

註2：ナチス党党員登録局は1939年に、1933年4月8日のザルツブルクでの申し込みは無効であり1607525という党員番号は抹消されるものとする、1933年5月1日に発行された3430914の党員番号は有効である、との決定を下している。その理由は、カラヤンがザルツブルクで5オーストリアシリングの入党費は支払ったものの以後党費を払い込まず、ナチス党ザルツブルク大管区は彼の行方を見失ったためとされている^{2,17)}。

註3：ザルツブルクはカラヤンの生地、故郷であり、文献⁴⁾において日本は「第2の故郷」となっている。

文 献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision; DSM-IV-TR. American Psychiatric Association, Washington D.C., 2000.
- 2) バッハマン, R.C. (横田みどり訳):『カラヤン 栄光の裏側に』音楽之友社, 東京, 1985.
- 3) 江藤淳:「夏目漱石小伝」『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社, 東京, pp. 10-30, 1975.
- 4) FM fan 1989年8月7日号:「緊急特集 “帝王” 逝く 追想のカラヤン I カラヤンが日本に残したもの ~日本は第2の故郷~」共同通信社, 東京, p.38-39, 1989. (無署名の記事)
- 5) ホイサーマン, E. (猿田恵訳):『カラヤン ——人と芸術——』東京創元社, 東京, 1971.
- 6) 市橋秀夫:「境界性人格障害と自己愛性人格障害の表出」精神科治療学, 17; 1231-1234, 2002.
- 7) 石井宏:『帝王から音楽マフィアまで』新潮社, 東京, 1993.
- 8) 川嶋直子, 作田明:「ウォルト・ディズニー ——失われたイノセンスへの憧憬——」病跡誌, 71; 16-23, 2006.
- 9) 小見山実, 井田めぐみ:「病跡学の対象人物について」病跡誌, 55; 73-74, 1998.
- 10) ラング, K. (齋藤純一郎, カールステン・井口俊子訳):『チェリビダッケとフルトヴェングラー ——戦後のベルリン・フィルをめぐる二人の葛藤』音楽之友社, 東京, 1990.
- 11) ラング, K. (村上彩訳):『カラヤン調書』アルファベータ, 東京, 1998.
- 12) 諸石幸生:「年表形式でたどるカラヤンの生涯」『ONTOMO MOOK カラヤン 全軌跡を追う』音楽之友社, 東京, p.41-72, 1996.
- 13) 中広全延:「セルジュ・チェリビダッケ, その関係の様式」病跡誌, 60; 73-81, 2000.
- 14) 中広全延:「自己愛性人格障害の診断基準の有効性について, 指揮者フォン・カラヤンをめぐって」精神経誌, 106; 304-310, 2004.
- 15) 中広全延:「カラヤンの閉じた目」病跡誌, 70; 60-69, 2005.
- 16) 夏目純一:「父の病気」『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社, 東京, pp.189-191, 1975.
- 17) オズボーン, R. (木村博江訳):『ヘルベルト・フォン・カラヤン』白水社, 東京, 2001.
- 18) 佐々木豊:「カラヤンを読む 日本語で読めるカラヤン文献のすべて」『ONTOMO MOOK カラヤン 全軌跡を追う』音楽之友社, 東京, p.100-102, 1996.
- 19) シュナイダー, K. (平井静也, 鹿子木敏範訳):『臨床精神病理学』文光堂, 東京, 1978.
- 20) 志水彰, 頼藤和寛:『精神医学への招待』南山堂, 東京, 1999.
- 21) シュトレーゼマン, W. (香川檀訳):『ベルリン・フィルハーモニー 栄光の奇跡』音楽之友社, 東京, 1984.

- 22) 高橋正雄：「森田草平の『夏目漱石』 ——その病跡学的な側面——」 病跡誌, 71 ; 84-87, 2006.
- 23) テーリヒェン, W. (高辻知義訳)：『フルトヴェングラーかカラヤンか』 音楽之友社, 東京, 1988.
- 24) 横田みどり：「訳者あとがき」『カラヤン 栄光の裏側に』 音楽之友社, 東京, p.516-518, 1985.